

田村実造編

明代滿蒙史研究

山田 信夫

本書は、先年完成された明実録抄「明代滿蒙史料」(二八卷)の研究編に相当するが、右史料集の編纂刊行にたずさわってこられた諸氏が、それぞれ得意とするテーマをかがけてものされた論文集のかたちをとっている。

そこには一貫した共通テーマがあるわけではない。しかし、代表者・編者の田村教授が、「もともと史料篇にたずさわっていた六年間に、各自が思い思いに明実録やその他の史料からぬきがきしっておいた資料カードを整理してまとめた研究のうちの一つの成果である」、「『明代滿蒙史料』を利用した一サンプルである」(まえがき)と述べられたとおり、各論文は、右史料集刊行にとりくんだ蓄積があきらかにその成立の基礎になっている。所収論文は次のとおりである。

明実録の研究……………	閻野 瀋龍
明代の北辺防備体制……………	田村 実造
開中法の展開……………	寺田 隆信
ダヤン・カンの研究……………	萩原 淳平
建州女直社会構造の一考察……………	河内 良好
ムクン・タタン制の研究……………	三田村泰助

——潢州社会の基礎的構造としての——

元末明初のチベット状勢……………佐藤 長
明季三代起居注考……………今西 春秋

各論文、いずれも相当の力作であり、一々について十分な論評を加えることは、いまの私には不可能である。ただ、右の論文題目を一見されればわかるとおり、それぞれのテーマはいろいろであるようではあっても、明代滿蒙史研究という大テーマとしては、肝要なキーをすべて、分担しておさえているといつてよい。すなわち、基本的史料たる起居注・実録の書誌学的研究にはじまり、明朝側の問題、そして、明朝に対して、滿洲・モンゴル・チベット、それらが欠けることなく扱われている。このような、明代滿蒙史研究の、いわば基本的体制、姿勢というものに注目しながら、各論文で扱われたところを一応紹介したいと思う。

収められた八篇のうち、冒頭の閻野氏と今西春秋博士とが、それぞれ、明代史研究の根本史料たる明実録、またその基本としての起居注に関して発表されている。とくに、閻野氏の研究は、まさに本書冒頭に収められるにふさわしく、先年発表された「皇明実録私考」(『神田博士還暦記念書誌学論集』一九五七)に続き、このさい、明実録の研究史をまず述べ、次いで明代二三朝、その歴朝実録について、一々その纂修の時期いきさつ、纂修の体制・各担当官などを詳細に考証され、明らかになるかぎりのことをまとめられた。その間には、従来の諸研究の誤謬も多く指摘されているし、伝鈔本の多い明実録を利用するには、その書誌学的考察はいよいよ求められること多くなるにちがいない今後、まず手がかりとすべき研究というべきである。

なお、最近、中華民国の中央研究院歴史語言研究所で、国立北平圖書館に蔵せられた紅格本明実録の影印に校勘記を附したものが刊行されはじめ、定本の刊行本として江湖の評判となっているが、その対校のさい、わが国の内閣文庫、宮内庁書陵部その他に蔵せられている伝鈔本が漏れていることは、間野氏も云われたとおり残念なことであった。その点、間野氏が、卷末に、わが国に伝わる主な諸書について、その現存の実状を一覧できる表を作製して附載されたことはありがたい。

今西春秋氏の「明季三代起居注考」。同氏が、早く（昭和九年）、わが国、当時の上野図書館所蔵の万曆・泰昌・天啓三代の起居注と内閣文庫所蔵の天啓起居注を見出し、報告されたことは、当時注目されたことであつた。「明の起居注について」「同補正」『史料』一九ノ四、二〇ノ一。本論文の表題とされた明季三代起居注とは、この三代のものであり、同氏によれば、明では実際に起居注を修めたのは明初と明末とだけの由で、その現存するものとしては、北京に万曆起居注のあることが報ぜられている以外は、日本にあるものだけである。

本論文は、同氏前稿にあらたに補正を加えてまとめられたものであるが、歴朝の起居注を概観され、この貴重な、わが国所蔵の三代起居注について、その体裁・内容を詳しく紹介し、一般に明起居注纂修のいきさつ、とくに、洪武以降絶えていたと見える起居注を復置すべく、万曆三年、張居正の建議するところに詳察を加えられ、一般的に起居注と実録との関係について、内容の具体的比較にまで及んでいる。やはり、起居注一般、とくに明代史研究の根本史料としての明起居注を考えるばあい、まず参照すべき

一篇である。

他の六篇は、すなわち歴史研究であるが、そのうち、田村・寺田両氏は、明朝の北方民族に対する方策の問題をとり上げた。田村教授によると、明とモンゴルとの関係は、正統ごろまでの約八〇年間を第一期、太祖・成祖に代表される明の優勢期とし、それに次ぐ一二〇余年間は、モンゴルの優勢期として第二期に、あと第三期が双方の和平期に、と区分される。その第二期、土木の変のころ以降、明が北辺防備に腐心し整えた防備体制を中心に、明の北辺策を考察し、まとめられたのが、田村教授の論文である。

第二期の防備の枢軸をなした九辺鎮について、それ以前の防備体制から説きおこし、まず、その成立の過程、次いでその組織に詳察を加えられた。従来、各種史書に伝えられながらも、記事に異同も少なくなく、必ずしも明らかでなかつた九辺鎮の実態が明らかになされたといえよう。なお、明の北辺防備の一重点であつたオルドス地区について、とくに、ダヤン・カン出現以前の天順から成化時代にわたるモンゴル族のオルドス占拠のいきさつと明側の防備体制が、別章としてまとめられている。

この北辺防備の防衛軍士への物資補給は、政府にとつても人民にとつても大きな負担であつたことは、田村教授も指摘されたところであるが、その補給の問題を考察したのが、寺田氏の論文である。

寺田氏は、先年来、明代の辺餉問題の研究をすすめておられ、すでに、「明代における辺餉問題の側面——京運年例銀について（一）」『清水泰次博士追悼記念、明代史論叢』東京、一九六二、「民運糧と屯田糧——明代における辺餉問題の側面（二）」『東洋史

研究』二一ノ二)の兩篇を發表しておられ、本論文はそれに続くもので、三部作の完成といえよう。辺備確保のための四方策とされる屯田糧・民運糧・開中法・京運年例銀のすべてが、これで明らかにされたことになる。とくに本論文では明朝經濟史・塩政史の一環としては、今までも注目されていた開中法の問題を、あらためて北辺防備に関する經濟問題として、その實際的役割を焦点ずけて解明されている。今後は、北辺の軍事的消費地帯における流通機構の問題へと發展するであろう。

中国王朝の対北方民族政策は、歴代、その王朝史のなかでも大きな問題の一つであったことはいうまでもない。多くの研究者の関心をひいてきたゆえんである。そして、それが通史的に把握されることは、また、東アジア史全体の把握にも、一つのキーポイントとして重大な意味がある。のみならず、類似的歴史現象は東アジア世界以外にもやはり重大な問題として存在し、史料豊富な中国史についての知見は、それらの問題を考えるばあいは、とくにわれわれ日本の研究者にとっては、何より有効な、あるいはまず求むべきことだと私は思っている。しかし、中国各時代について、たとえば、その防備体制一つにしても、各種史籍に一応書かれてあつてわかつていっているようであつても、その実態が不分明のまま残されている点はまだ多くある。そのさい、明代については、根本史料、とくに實録を最高に消化されているはずの阿氏の研究は、いずれも大いに具体的であり、詳細な実態が、その動態も見のがすことなく明らかにされたとすれば、右のような観点から、寄与するところ少くないはずである。

清朝前史としての明代の滿洲に関して、三田村・河内阿氏の二

篇が収められている。

早くから今西氏などと共に滿洲語文献を用いることを開拓された三田村氏は、一方では、マンチュ・グルンの構成の分析にもその先駆的業績をあげておられた(滿珠國成立過程の一考察「東洋史研究」二ノ二)。今回の三田村氏の雄篇は、そのような、早くから同氏の関心するところを、改めて詳細に、大成しようとされたものと云えよう。副題に、——滿洲社会の基礎的構造としての——とあるとおり、その意図される場所は明らかであるが、全篇一三章に分かたれているうち、第一―八章だけが、今回發表されている。従つて、この雄篇の全貌はまだ明らかでない。のみならず、目的とされた滿洲社会の基礎的構造としてのムクン・タタン制そのものについての所論は、むしろ未發表の後半部に詳説されるものと思われるが、ここに發表された部分だけでも、ずいぶんと読みごたえのあるものである。

ムクン及びタタンとは、女直社会の構造を考察するとき、まず当面する社会集団であり、それが又、マンチュ・グルンの構成にも、あるいは清朝八旗制の成立にも関連するものとして、せひとも明らかにされねばならぬこと、いうまでもあるまい。三田村氏は、今まで此の問題にふれた徳淵一・戸田茂世「ジュセンの一考察」(「東洋史研究」五ノ二)、安部健夫「八旗滿洲ニルの研究」(「東亜人文学報」一ノ四、二ノ二)、東方学報京都二〇)の批判から出發され、滿文老檔太祖卷七十九以降に著録されている、明廷から女直に与えられた勅書の表、いわゆる「族籍表」をめぐる、その史料としての性格づけ、解釈に飛躍的な成果を示された。滿文老檔の正当な読み、相応する中国文献の駆使——ここで、(滿蒙史料)編

纂時の蓄積がやはりものを云う——は容易に余人の追隨を許し、それにもない。

滿洲史に関するいま一つの論文、河内良弘氏のもの、三田村氏のもの、その社会史的考察という点では共通するが、その視点は、また別方向からである。すなわち、その社会関係のうち、生産関係と関連する奴隸の問題をとくに扱われた。

従来、永楽・宣徳の交替期を境界として、その前後に顕著な変化が認められるとした見解がやや一般化し、とくに漢人奴隸が急速に増え、女真社会の生産関係の変化にまで議論は発展していたが、それを批判しようとしたものである。具体的には、その時期の朝鮮への逃亡者の増加という事実の再検討であり、従来、諸論が、主として李朝実録の記述にもとずき被虜奴隸と規定したのに対し、中国側、特に明実録の記載を対比させ、それは逃亡軍士にほかならぬとした。それら逃亡漢人たちを掠奪したという事実の認められないこと、さらに、一般的には奴隸売買・奴隸労働はごく一部に認められるだけで、決して普遍化したものではないと主張された。この両氏の論文を通読し、滿洲史あるいは滿洲史研究の面白さというものを改めて感じた、というのが、私のいつわらぬ第一印象である。とくにこの明代については、李朝実録、明実録という根本史料の集大成されたものがある。また滿文老檔という民族語文献としてはやはり屈指のものがある。それらすべてを存分に用いることが必要であると同時に可能なのである。たとえば、河内氏のばあい、李朝実録と明実録との記事の相異が同氏の論点の一つであり、従来朝鮮側の記述にもとずいて立論されたことを、明側の表現によれば正しくないことを指摘された。このようなばあ

い、両者の相異を指摘することは、いわば容易であるが、そのいづれを正しとするか、あるいは、その相異するところに何か事実を見出すか、それは必ずしも容易ではないだろう。事実、河内氏のばあいも、それだけが論拠ではなく、その背後の諸現象を固めていっての立論であり、それはいろいろな面からなされている。

もう一つの民族語文獻、とくに社会史的考察のばあい、それが最終的にはもつとも抛りどころとすべきものであろうが、河内氏のこのテーマ、社会関係、生産関係の分析に、滿洲語文獻がどの程度用い得るか、いま私は知らないが、今後の問題だと思ふ。三田村氏は、まさにその線で進めておられるわけである。

萩原氏の「ダヤン・カンの研究」。近世モンゴル史において、「二人のダヤン・カン」とか「なぞのダヤン・カン」とかいわれるダヤン・カン問題は、たしかに不思議の一つである。それは、モンゴル史料と中国史料、それぞれに混乱があり、さらに両者に大きな不一致が見られることにもとずく。萩原氏は、故和田清博士の研究の批判から出発し、その治世年代や事業について大いに新説を唱えられた。実は、この和田説批判の新説に対し、松村潤氏が早くも反批判を行って（『東洋史研究』二三の一、「批評・紹介」）、双方の論証の経過を通じて思っておくことは、やはり、さきにもふれた民族史料と中国史料との関係、中国周辺民族史研究の基本的操作の問題である。萩原・松村両氏ともふれておられるが、当初和田博士がとられた方法、モンゴル史料を中心に中国史料を対照し、両者の記述の矛盾するところを解き補ってゆくという、それはたしかに原則である。萩原氏は、もちろんそのことは承知

の上で、敢て、まず中国史書の各種所伝を綜合的に考察しなおした、というのが本論文である。朝貢記事の解釈など、〈満蒙史料〉編纂の実績はそこにもたしかに現れていて、ダヤン・カン問題に關する中国側史料は大いに整理され、そのかぎりでは、氏の意圖されたことは十分に果されているといえよう。この上は、松村氏が整理して示されたモンゴル史料をあらためて根本的に検討する必要がある。松村氏もふれられたが、ごく最近発刊されたアルタンの伝記などの新史料も併せ、個々のモンゴル文献について、中国文献に対すると同じほどの高度の史料批判の余地は多分にあると、私は予想している。そのことは、萩原氏自身も今後の問題として、本論文の終章「ダヤン・カンに關する蒙古資料批判」でふれておられるとおりである。

さきに、史料篇で「明代西藏史料」(蒙古篇十所収)を編纂された佐藤長氏が、チベットに關して本論文集中でも一研究を発表しておられる。いつものことであるが、私などにとつては、佐藤氏近年の労作は最初から無批判に受けとらざるを得ない思いである。チベット側原史料を精力的にこなしながら、一方、歴史的に密接な関連にある明朝側記録も駆使してゆく以上、少くとも諸事實を明らかにしようとする行論に対し、容喙する余地はなさそうである。本論文で対象とされた元末・明初という時期については、チベット記録と中国文献とのあいだにとくに大きな不一致、すなわちチベット文献によれば元末いらい抬頭し明中期まで中央・西チベットを統一的に支配したとされるバグモドゥバ王朝の權威が、中国文献の記述からは認められないという事實を解明しようとなされた。中国文献では知られていない、チベット中世史上まれな英雄

とされるジャンチュブギンツェン以下、歴代の事蹟を跡づけることが第一段階。次いで、太祖以降の明の対チベット政策を考え、チベットの現実からすれば、バグモドゥバこそあくまで第一等に遇されるべきなのに、明朝ではそのように扱っていない。従つて、明史籍にバグモドゥバの現実の姿が適確に示されていないのも、明朝の政策の反映、また明朝とチベット諸勢力とのそもその接触のあり方の反映であることの論証。最後に、そのような事情を考えると、再転して今度はチベット文献をもう一度見なおす。すると、その記載のもう一つ奥にある事實、具体的には、バグモドゥバの統一といわれている、その支配力の実情がうかがえる、というのである。双方の記録の比較考察にあたり、矛盾するところがあるとき、その矛盾そのものに一つの史実を解明する手がかりを得る、そのような、歴史研究法の基本の一つがみごとに生かされているといえよう。

はじめにも述べたとおり、個々の論文について、そこで扱われた歴史上の問題その他についての立論・結論を批判することは、この小文でははじめからあきらめていた。それはまた、それぞれの分野内で、それぞれの専門家が十分に批判もされ、学史的位置づけもされるであろう。正直なところ、編集委員より本論文集の書評を依頼されたとき、そのような意味で、まことに当惑したものである。しかし、今は、本書について発言する機会を与えられたことを、別の観点からうれしく思っている。それは次のようなことにあらためて気づいたからである。

この論文集は、たしかに、明実録抄「明代滿蒙史料」編纂事業

の帰結であった。執筆各氏は、テーマはいろいろであつても、共同作業の間に、明実録を中心とする中国文献について、確実な扱い方を共通の基盤で身につけておられることが、第一に目につく。第二に、このようにテーマを揃えられ、顔ぶれを揃えられると、曾ての共同作業グループが、単なる共同作業の域をこえ、一つの研究集団として形成されてきていることに気づくのである。しかも、それは東西を通じてよそこには見られぬ強力なものである。集団形成というと語弊があるかもしれないし、御本人たちは、おそらくそのようなことを意識しておられないだろう。しかし、各自の指向は、期せずして、その方法・問題の基盤を共通にし、各自それぞれに考察されたところは互いに相補つて、究極的には、明代満蒙史研究という大テーマのもと、研究を分担しあつている。すなわち、明らかに一つの研究体制の形成である。しかも、今ま

での、明実録を中心とするという段階では当然であろうが、明代満蒙史研究ということからいえば、もう一つ不足していると思われるモンゴル史料の十分な利用研究の面も、既に田村教授の下で充足されつつあり、より若手の研究者が新しいスタッフとして加わりつつある。三田村・佐藤両氏自身によりすでに到達されている満洲語・チベット語文献利用の層が、いま一つ厚くなるとともに、このような期待が実現してゆくと、いま、私の指摘したような研究集団による第二・第三の論文集を見る日も遠くないだろう。その意味で、本論文集は、帰結ならぬ発足の第一歩でもある。

(A5判 本文六六二頁 図版八 折込図六 昭和三八年一〇月京都大学文学部刊)

(大阪大学助教授)